

＜対話＞はどんな力を育てるか

パネラー 津田 仁（大阪府教育委員会教育監）

津村 記久子（作家）

林出 勝代（河南高校教諭）

コーディネーター 湯峯 裕（本会理事長・春日丘高校校長）

今年度の全体会では、「＜対話＞はどんな力を育てるか」を問題提起として、芥川賞受賞作家・津村氏を含むパネラー三名と、本会理事長であるコーディネーター・湯峯氏とが会し、各々の活躍する分野から意見を交換した。問題提起をまさしく体現するかのように、四者による＜対話＞が実践された、その場の様子を伝える目的で、要所については、各人の発言をできる限りそのまま記録した。

■自己紹介

津田氏（以下、津田）：大阪府教育委員会教育監。大学時代は臨床心理学を専攻し、文化論や、作品の底に流れる普遍的な無意識といったテーマに興味を持ち、国語教員の道を目指す。高校国語教員を経た後、教育委員会へ。教育現場と教育行政をそれぞれ 20 年近く経験している。

津村氏（以下、津村）：小説家。大阪府出身。大阪府立今宮高等学校、大谷大学文学部国際文化学科卒業。『ミュージック・ブレス・ユー!!』で第 30 回野間文芸新人賞受賞。『ポトスライムの舟』で第 140 回（2008 年下半期）芥川賞受賞。22 歳で就職、翌年退職・再就職し、34 歳まで会社員。新人賞を受賞するまでの約 7 年間、会社員と小説家を兼業した。

林出氏（以下、林出）：今年度より府立河南高校に転勤。『ポトスライムの舟』という作品に出会い、教材化、三年生の授業で取り上げた。本アセンブリーに際して、教材プリント及び生徒の感想文等、授業実践を取りまとめた資料を作成。

（→全体会資料「ポトスライムの舟を読む」<https://www.osaka-c.ed.jp/blog/imamiya/asm/index.php>）

■授業での実践をふまえて

林出：この『ポトスライムの舟』という作品を読んで、今日ぜひ津村先生にお話を伺いたいと思っていることは、三点ございます。

一つは、作品の最初に「長瀬由紀子」という主人公の名前が一回だけ、漢字で出てきます。あとは全部カタカナで、「ナガセ」と書かれております。この、「ナガセ」と書かれていて、それを読み進めるということが、生徒の感想文の中では「なかなか感情移入ができない」と。漢字で書かれると、その人が女性だとか、どんな風に生まれて、どんな風に育って、どんな気持ちを抱いていて、どんな好みがあったとか、そういう人格、性格がわかるんですけれども、「ナガセ」と書かれていて、ずっとそれが続く。こちらと距離を持たねばならない。普段の小説の感じだとずっと入るんだけど、なかなか入らない。そういうもどかしさというのを、生徒は感じるのですね。それが作品の中でどんな意味を持っているんだろうかということ、私なりにはこれがポイントかなと思って問題を作りまして、私なりの解答も作りました。そのあたりのことを、津村先生の方から、どんな意図でお書きになったのかを伺いたいと思います。

津村：「なんであなたの書く小説は登場人物がカタカナなのか」ということを、ずっと、もう七年以上、何か人前に立つたびに必ず聞かれています。そんなに特別なことだとは思っていないんですけども、灰谷健次郎（注¹）さんの子供が主人公の小説だとかは、だいたいカタカナの名前。本を読むのが好きだったので、児童文学は、海外のものも日本のものも読みましたけども、人物名を漢字で、本名ではあまり書いていない。例えば津村記久子という主人公なら「記久子」って漢字で書いているような小説はほとんどなかったです。児童向けの小説をずっと読んできて、それで小説を書こうと思ったので、その頃の作法が染み付いているというか、そこから離れられない、というのが、大きな理由だと思います。

他にも理由はあって、林出先生のレジュメにあるように、「女性であることや、登場人物の個性が際だって物語が展開するというより、おかれた状況によって誰でもがそうなりうる、そう考えうるという意味で、人格性が薄まる印象を与える」という、ものすごく的確な説明をさせていただいて、だいたいいつも理由としてはこちらの方で説明します。カタカナで書くことによって、登場人物をぼやかすんですね。

自分が小説の主人公をどう捉えているかということに関係してくるんですけども、私は、一人の人間のことでそんなに書けないというか、雑駁に言ってしまうと、一人の人間について小説に書く価値はそんなにないと思っていて。「私が・私が・私で・私を」ということばかり書くことなんて何の意味もないと。だから登場人物を、人形劇の人形ぐらいの、「マルにテンテン」ぐらいの人物として受け取って欲しいという部分がどこかにあって、まず登場人物からその影を取り去ったり、「私が・私が」という部分を取り去るために、カタカナにしている、というのも大きいです。また、主人公から見る人物では、漢字の人物、例えば「岡田さん」という人物が出てくるんですけども、「じゃあなんで『岡田さん』は漢字なの？」、「なんで『ヨシカ』はカタカナなの？」ってなると思うんですけども。主人公がカタカナであることには、存在を消す・存在を薄めるという意味があるんですけど、主人公から見た他の登場人物が漢字だったりカタカナだったりするのは、「主人公からの距離」です。例えば手紙を書いたりする時に、手書きの場合は（相手の名前を）カタカナにしたりひらがなにしたりで、フォーマルにしない、と思うんですよ。「岡田さん」は「ナガセ」という視点人物から見て、フォーマルな存在です。仕事先の先輩。で、「ヨシカ」っていうのは友達なので、カタカナで「ヨシカ」って名前になっています。他に「恵奈」は、友達の娘なんですけども、ずっと漢字なんです。「恵奈」はあくまで友達の娘なんです。ひらがなで「えな」って書く手もあったかもしれないですけども、それは——「恵奈」という登場人物が戸籍上ひらがなの名前が無い限りは——、（もしひらがなで書くならば）子供だから、という侮りにつながると思いましたので、「ナガセ」から見た友達の娘というちょっと遠い存在ということで、「恵奈」は漢字になっています。

湯峯：じゃあ、なんで「ナガセ」は最初の一回だけ漢字になっているんですか？

津村：一応本名は明らかにしておきたい・しておかないと、と思ったので。読み手として、「こいつ本名何やねん？」と。だいたい自分の書いてきた小説では、どこかに本名を知る機会があったんですけど、この小説ではその手は使えなかったんだと思うんですよ。一番最初に書き始めた時点では、ここに「長瀬由紀子」は入っていなかったと思います。後で見て、「どうしてもこいつ名前出てけえへんなあ」って、ここに入れたと思います。

■ “出会わない系” の小説

（1）灰谷健次郎…1934年10月31日生、2006年11月23日没。日本の児童文学作家。1974年に、『兎の眼』で児童文壇にデビューし、同作はミリオンセラーとなった。その他、『太陽の子』『天の瞳』等の著作がある。

湯峯：隣に、作品を本当に書いた人がいらっしやると、話しにくいと思うんですけど、そこはあえて質問してくださいね。勇気を持って（笑）。

林出：恐れ入ります（笑）。

「その人物が何を思っているのか」が書かれてない、というのは、生徒にとっては、取り付く島がないというか。彼女が「していること」、「行動」、そのことから類推する、あるいは推測する他ないんですね。普通の小説でなら描かれる感情だとか、説明されている「こう思いました」「ああ思いました」というところが、あえて取り去られているわけですから、生徒たちは、ディテールというか、書かれている中身でこの人がそうであること・そうならざるを得ないこと・そう臨まざるを得ないのは何故かということ自分たちで考えていく、という。彼女には感情移入できない、できないからこそ、彼女を一生懸命見る、客観視するというか。書かれていることについてより細かいところまで読まなければならない。そういうところにこの小説の特徴があるんじゃないかなと考えました。

では、二つ目にいきます。

この会の前に打ち合わせで津村先生からお話を伺った時に思いました、女の人ばかりがたくさん出てくるんだ、と。で、はっと思ったんですね。これほどうちのめされた女の主人公だったら、どこから、若いかっこいい男の人がやって来て、「君の価値は僕だけが知っている」みたいなね、そういう話に、何故ならないか、何故ならなかったのか、と。私がそれに気がついた時に、津村先生の方から、「それは、誇りだ」と。その一言だったんですけども、それが私の胸に非常に残っておりまして。

津村：私は「誇りだ」と言ったんですね。

林出：そうなんです（笑）。

津村：すごい何か、怒っていたんでしょうね（笑）。

人が読みたい小説と、自分が書きたい小説というのは常に違うということは、デビュー当時からわかっているんですけども、私が書きたい小説を書こうと思っています。人が読みたい小説が、林出先生がおっしゃったような、誰か男の人が現れて、「君の価値は自分だけが知っている」と言う（笑）？ そんなことないもん、ということです。知ってるから、自分自身。どれだけどん底でも——そんなに私も苦労しているわけではない、パワハラに遭った程度なんですけど——、そんなに、他人は救ってくれないです。誰か一人が、誰か一人と出会って、人生が変わった、みたいなことを言うのは簡単ですし、そういうことを吹聴して回る人もいます。「旦那に人生を変えてもらった」「彼氏に人生を変えてもらった」「あるメンター（注²）に人生を変えてもらった」というふうなことを、言いたい人は言って回ります。それは言える経験だから言って回るんです。でも他の人は一人で耐えています。私はその、一人で耐えているという部分の方が価値があると思いました。他の人はどう思うかわからないですけど。この小説を書く場合は、ありものの人間関係の中だけでも、人間は変わる、ということを書きたい、と思っていて。最初にこの小説を提出する時、編集者に「“出会わない系”の小説を書きたい」という話をしたんです。要するに、ある出会いによって——男性でもいいですし、女性でもいいんですよ——、私の人生をまるごと救ってくれる新しい誰かと出会うことによって、私は変わった、ということではなくて、その人が持っている既成の人間関係の中だけで、彼らは自分のことを、陰日向なく見てくれているし、完全に救い出してくれるわけではないけれども、立ち直る力は少しは与えてくれている、ということを書きたいと思いました。だから、この小説に出てくる登場人物は全員、既知の友人か、知っている

(2) メンター (mentor) … (賢明で信頼の置ける) 助言者。指導者。

友人の娘とか、自分の母親とか、仕事先の先輩とかしか出てこないです。誰とも「出会わせない」ということは意図的なことで、全員女の人というのも意図的なことです。このことで、たまに男の人が怒っているのを見かけることがあります。「なんでこんなに女しか出てけえへんねん」——湯峯先生も言っておられましたね（笑）。「なんで男に頼らへんねん」と誰かが言っていたということを聞いて、ああ、やっぱりそうなるんや、と思ったんですけども、そういうのが現実的ではないケースもあります。習慣的にそうになっている人なら、別に自分が頼れる人に頼りゃいいんですけど、私はそうではないので、自分の力で立ち直るといのは一体どういうことか、というのを、この人（＝ナガセ）が刺青を入れたりとか、ポトスを育てたりとか、ぐちゃぐちゃぐちゃぐちゃいろんなこととして、その中から立ち直っていく様子というのを書くことに、私自身としては価値を見出したので、このように書いています。

湯峯：たまたま男二人、女二人で分かれてしまいましたね（笑）。

今まで黙って座っていらして、とんでもないタイミングなんですけれども、津田先生、何か。

津田：ちょうど男性・女性の話が出ましたが、僕みたいなおじさんはどうしたらいいのかな、と思ってね（笑）。

さっきおっしゃった、「私が・私が」を消しているけれども、逆にそれで存在感が出てきているといういろんな効果だとか狙いだとかがあったんだと思うんですけども、それによって、逆に主人公の存在感というものを感じたんですけどね。

林出先生に聞いて恐縮なんですけど、授業で取り扱われて、例えば私がこの歳で読んで、ああ、こんな生き方を、特に女性たちはしているんだ、と感ずることと、高校生の女性・男性が読むのとではどうでしょう。男子高校生はどんな反応をしたのかな、と思いました。この作品と、高校生とが、どんなく対話＞をしたのかな、という。

林出：授業自体は、定期考査も終わりました、考査後の時間が三時間ほどありまして、三年生の二クラスでやってみたわけです。四月当初から、プリントに設問があって、とにかく書きなさい、書きなさいということで。書かせておりまして、だから今回も書かなくちゃいけないんだということはみんな思っていたと思います。印象は、男子生徒は「わからん」という言い方をしていたような気がします（笑）。でも、今宮高校の小山先生の実践での生徒の感想文にもありますように、「わからないんだけど、とにかく食らいついていこう」と。ぶっちゃけて言いますと、定期考査も終わっているわけです。のほほんと聞き流せばいいようなものなんですけど、難しいと思いながらも一生懸命問題にあたった、という感じですよ。ただ、解答を見ますと、やっぱり女子生徒の方が…（よくできている）。（男子生徒は）共感も難しいんですよ。性差という意味で言えば、あったかもしれないですね。ただ、作品を理解することに関して言えば、男の子だからわかりにくくて、女の子だからわかりやすいというのは、ないんじゃないかと思いますね。むしろ、さっき津村先生が「たかがパワハラ」とおっしゃいましたが、「たかがパワハラ」どころではなくて、それはもう非常に大変なことだと、自分の存在自体が否定されてしまうんだと、生きている価値がないと皆に思われているんだと、授業の前には申しましたし、それはいいじめにもつながるだろうということで、その辺に関しては、生徒に最初にモラルハラスメントということについて知っておいてもらわないと、ナガセという人物の置かれている状況はわからない、ということは話をしておりますので、それがあったから余計一生懸命読まなくちゃ、と思ってくれたのかもしれない。

■オープンな存在

林出：さきほど、ヨシカ（カタカナ）と岡田さん（漢字）というのは、ナガセからの距離の差だということをおっしゃっていましたね。私もそうかな、と思っていたんですけど、間違っていたらどうしようかなと思ったので、問題にはヨシカのことをあえて避けたんですね。でも、よかった一、間違ってた一、と思って。ナガセを中心に、彼女のことをどんな状態になっても全て受け入れてくれる人の輪と、そうでない人たちがいるので、ヨシカは、その輪の中にいるんじゃないかな、と思っていたんですが、よかったです、間違ってたんだなと思って。ほっとしました。

で、三点目にいきたいと思います。

さきほど出た、友達の子供の「恵奈」、この子のことです。小説中では、ナガセが「つらくなったら手を抜けばいいんだ」とはじめて思ったと書かれているんですね。つまり、非常に悲愴に生きていた彼女が、ここに来て、ほっとする、という。ほっとする時に、恵奈ちゃんから自由研究が来るんですね。もちろん、ポトスライムは低奏音みたいな形でずっと流れているんですけども、そのポトスライムと、恵奈から送られてきた自由研究というのが、彼女にほっとしたという気持ちをもたらしてくれる。恵奈というのが漢字で書かれているということはですね、ナガセを取り巻いている輪の外にいる人ですね。その、外にいる人が、さきほども話にありましたが、男じゃなくて、成人じゃなくて、子供である、ということ。その人物が、自由研究を送ってきてくれたと。そのところで、うちの生徒が感想文に、「悲壮感であったナガセは自由研究を見て、自分の好きなところは一生懸命書き、苦手な部分は手を抜き、分からないところは母に助けてもらっていた、純粋な考えをもつ幼稚園児の恵奈の自由研究のように、辛いと感じれば、上手く手を抜けばいいことを学」んだんだ、と書いていたんですけども、どうして、彼女（＝恵奈）だったんだろう、どうして幼稚園児でなくてはいけなかったんだろうということと、彼女から送られてきたもので、返事を書くのを後回しにしようと思うようになる、ある意味キーパーソンのような、この恵奈ちゃんが、小説の中で「かわいくない子だ」と書かれているんですね。その作品の中での意味とか、ここに登場させてらっしゃる意味とかを、お聞きしたいなと思います。

津村：「かわいくない」って書いてましたよね。（笑）あんまりかわいくないな一、と思って。私は、子供は別にかわいくなくていいと思うから、かわいくないって書いてます。子供がかわいいっていうのは大人からのただの押し付けです。子供自身は、子供であることに関して、その時点で完璧なのであって、大人から見たかわいさなんて必要ないと思うので。「かわいくないな、愛想無いなこの子」ってこの主人公が思うのは書いた方がいいかなと。幼稚園児という叙述があるとすぐかわいいじゃないの、っていう偏見はあるやろな、と思いましたので、あえて注意書きとして書きました。

幼稚園児であることについては、小学一年生でもいいっちゃいいと思うんですけど、小学生よりは幼稚園の年長の方がオープンな存在なんじゃないかなと思って。年少・年中・年長、ってあるんですね。で、年少でもあかんし、幼すぎるし、年中でもまだちょっと足りひんし、小学生やったらちょっと社会的過ぎる、社会を知りすぎていると思ったので一番自分の興味に集中できるような、かつ世の中を見始めて、で、自分の世界を持っているといたら年長かな、っていうふうに思ったので、たぶんこの恵奈は年長、ということにしたんだと思います。

オープンな存在ということに関して、「かわいい」ということが子供を規定しているというようなことを言いましたけれども、まさにナガセ自身が、パワハラは受けるし、毎日毎日働かないと生きていく価値がない、と自分で思っていて、他人に言われたわけじゃないし親も別に働けなんて言っているわけじゃないんですけど、自分に対する規定でがんじがらめになっているという異常な状態なので、そういう状態に対して、外から風通しをよくする存在として、オープンな子供がいたらおもしろいんじゃない

かなということで、恵奈が出てきます。恵奈が何で自由研究をよこしてくるのかということに関しては、要するに恵奈がやりたいことをやっただけなんですね。だからイチゴはすごいちゃんと描くけど、嫌いなものはどうでもいいみたいな描き方で。それはまさに子供なんですけども、ただこの恵奈は、自分のお母さんの友達の人（＝ナガセ）が、ポトスを食べられないということをすごい悩んでいたということを知っていて。全然知らないところから、一応気にはかけていたという。そういうことって、結構人生であったりします。別にこの恵奈はこの人の人生を救おうなんて思っていない、小学校一年の女の子に、二十九ぐらいの女性の人生を救え、なんていっても物理的に無理があるんですけど、でも何か、そういうふうにして「気にはかけてるよ」っていうことは、結構無数にあって、全然知らない人が「心配してた」って言ってくれたり、すごく長いこと離れていた人から突然連絡があって「心配してたんやけど」って言ってくれたりみたいなことはあって。決定的に人生をまるごと救ってくれる相手っていうのはそんなにはいないんですけども、まあまあ気にかけてくれている人っていうのはちょいちょいいて、それってすごくありがたいよね、ってことなんですけど。それも別に、気にかけてあげてる、っていうんじゃないで、それだったら別に「お姉さんお元気ですか」っていう暑中見舞いが来た、みたいな展開でもいいんですけど。（笑）それではやっぱり、まだべたべたしていると思いますし。恵奈が好き勝手に生きているということが、好き勝手に生きている様子をナガセに向かって発信するというのが、ナガセにとって救いになる、ということに意味があるんじゃないかな、と思って書きました。

幼稚園ってめっちゃしがらみがあるんですけど。本当はものすごくやらしい所だと思います、子供どうしてすごいやらしいんです。私はそう思っているんで、幼稚園児ってかわいくない、かわいい幼稚園児なんて怪しいと思うんですけど（笑）。愛想無いくらいでちょうどいいと思います。その中で恵奈自身も苦しんでいる所があったんじゃないかな、と。そういう不器用さみたいなものを感じることもあるんです。私も幼稚園児の時のことをよく覚えてるんですけど、本当辛かったんですよ。幼稚園児がクローズな人間関係になった時は、とことんクローズになるし、一人の人間をいじめ抜くし、どんなことでも揚げ足を取るし、非常にやらしい集団になります。恵奈はそういう所で上手くやっていけないみたいな部分もちょっとあったから、ナガセにも親近感があったんじゃないかな。図鑑の蛇の部分ばかり見てるような子っていうのは幼稚園の中で排除されたりしますので。そういう意味で共感みたいなものもあって、それは別に、幼稚園児と、二十九歳の、仕事にぼろぼろにされた女の人でも、共通していればそこから通じ合えばいいと思うので、そういうことだって別にある、という意味で書きました。

湯峯：私はそこを読み飛ばしていたというか、勝手に「かわいい子」というふうに思い描いて、大人の勝手を押し付けていました（笑）。ナガセのポトスのことを気にかけてくれていて、「お姉ちゃん大丈夫？」じゃなくて、ポンと、自由研究を送ってきてくれてる所は、やっぱりかわいいと思うんですけど、この感覚がずれているんだなという思いがします。それは置いといて、さっきからずっと黙っていただいていて申し訳ないと思うんで、津田先生。（笑）

津田：困ったら話を振られる（笑）。私は国語の教員をやっていたといいましたが、実際作家の人にお会いした経験って、ないんですよ。最初勤めてた学校のすぐそばに、司馬遼太郎さんの家がありましてね。授業中に、教室から、たまたま姿が見えたりするんで、作家を「見た」ということはあるんですけども。教材を扱っていても、それを実際に書いた人とお話した経験はないので、勝手に、聞きたいことを聞くので許していただきたいと思うんですけども、小説を授業で扱っていたら、生徒たちもそうですし、教授者も作品と＜対話＞をするし、それから生徒たちともその作品を媒介として＜対話＞をする。そこで二つ質問なんですけども、作家の人は、他の人の作品を読んでいる時は、その作品とどんな

形で＜対話＞されるのか、というのが一つ。もう一つは、さきほど「自分が書きたいことを書くんだ」とおっしゃったんですけども、その向こうにいる読み手との＜対話＞ということは、作家の人はどんなことを考えておられるのかな、ということに興味がありまして。

津村：（一つ目の質問に対し）自分が読む時は、自分が作家であるということはほとんど考えない。おもしろいな、と思って読んでます（笑）。

（二つ目の質問に対し）書く時に読み手さんとの＜対話＞があるかということ、私はあまりない。とりあえず自分の書きたいことを書いて、それが通じていればいい、ぐらいの。「相手の心を動かしているか」みたいな所を、プロでものすごく売れている人とかは考えられると思うんですけど、私は考えられないので。気にしていないというか、気にする余裕が無いです。この文を読んだら、読み手はどう思うかというのは、予想できない。

湯峯：例えば、今回のこの、高校生の感想とかを読まれて、どんなふうに感じられますか。

津村：ちょっとびっくりしますね。「読み込んで下さってすみません」というか、本当に申し訳ない（笑）。高校生はもっと夢のあるものを読んでもいいと思うんですけど（笑）。感想中の、④番のMRくんの言っていることは全くその通りだと思います。私の小説を読ませられて——普通に生きていたら会うこともない現実のことばかり書かれている小説なんか、まだ十八とかで読んでもいいと思うんですけど——、すごい、大人やな、と思いましたね。賢いなー、私はもっとアホやったわー、と思いました。読んでくださってありがとうございます、それだけです。

■フロアとの＜対話＞

湯峯：今回のテーマは、「＜対話＞はどんな力を育てるか」なんです。が、＜対話＞を実践する、ということに読み替えて進みたいと思うんです。せっかく高校生の感想文という話も出ましたので、フロアの皆さん方に、いろいろと出していただきたいなと思います。今日の話についての感想でも結構ですし、お三方が言われたことについて、何か思ったことでも結構です。

◆僕は今宮高校の三年の生徒で、小山先生の授業の中でまさに『ポトスライムの舟』を読んだ向井という者です。今、津村さんが取り上げてくださった、④番のMRというのは僕です（笑）。この本を読んで、感想に書いたとおり、よく入り込めませんでした。よく小説は読んでいるつもりなんですけど、今まで読んでいた、例えば夏目漱石とか太宰治とか、そういう純文学とも、ライトノベルとも違った、あまり触れたことがないジャンルで、うまく入らなかったんですけども、読んでいくうちに、ある意味それが正しい読み方なんじゃないかなーと勝手に解釈しました。作家の人と出会える機会と言うのはないので、津村先生にちょっと聞いてみたいんですけど、さきほど、湯峯先生は恵奈のことをかわいいと思っていたりとか、林出先生は途中で男性と出会わせたらおもしろんじゃないかとか、そういう、さまざまな読み方が皆さんにあると思っていて。津村先生がこの小説を書いていろんな人に読んでもらって、いろんな解釈があると思うんですけど、津村さん自身が伝えたかった、書いているときに元になった一番のテーマなんかを教えてもらえると嬉しいです。

津村：当時、シモーヌ・ヴェイユ（注³）さんという哲学者のことを考えていました。三十四歳で亡くな

（3）シモーヌ・ヴェイユ（Simone Weil）…1909年2月3日生、1943年8月24日没。フランスの哲学者。第一次世界大戦前後の混乱の中、パリの高等師範学校を卒業し、哲学学級教員となる。25歳の夏期休暇中に、複数の工場の未熟工として断続的に労働、この経験が彼女に「働く」ということを思索させる重要な契機となった。その後スペイン内戦への

られたんですが、彼女はフランス生まれのユダヤ人で、イギリスに亡命して、そこで収容所の人と同じだけしかご飯を食べないという、半ば自殺のような方法で亡くなる人なんですが、いろんな職業を転々としてスペイン戦争に従軍して自分で鍋をひっくり返して怪我するとかドジなことをやって、イギリスに行っても後ろ向きな生き方をしてたんですけども、その人は教師をするくらいインテリやったんですけど、「働くって何だろう」って思われて、自分で工場労働をしに行って、そこで働くとはどういうことかということを考えたという。で、女の人が働くっていうのを書いてみようと思って。それで書き始めたというのが、アイデアができた時の話です。女工さんのこと書くんやったら、ということで、働くということがテーマになっていて。二十九歳ぐらいの人が女工さんになっているんやったら、一体どういう過ごし方でそういう状態になっているのかと考えると、大卒やったら正社員の時に絶対なんかあったな、というので、モラルハラスメントみたいなことが裏の設定として出てくる、という感じです。

◆こんにちは。私は今娘が今宮高校に在籍しております。私自身も今宮高校の40期生です。

私は読書をする時、頭の中で映像化してしまうという読み方をします。『ポトスライムの舟』をそういうふうに読んだ時、空気感というか、湿度と乾燥が、その場面場面で変わっていく感じがするっていうのが、一番の感想でした。で、今流行りというか、小説を映画化したりドラマ化したりということがあると思うんですけど、自分の書いたものが映像化されるというのは、どう思われますか。

津村: 私自身は、読んでもらえるきっかけになるんやったら、どんな話に改竄してもらってもいいので、映画化して欲しいですし、たまに話はあるんですけど、だいたい立ち消えになります。映像と文章というので、最近ストルガツキー兄弟(注⁴)というロシアの作家の、『ストーカー』というSF小説を読んだんですけど。文章が文章であることの良さっていうのはあると思うんですよ。質問者さんの頭の中で想像して読んでいるものが、映像化したら「何か違う」っていうことはありうるじゃないですか。で、その「何か違う」って状態よりは、自分の頭の中で考えていることって終わりが無いですよ。全く果てもないし、いつどう考えても自由やし。『ストーカー』はタルコフスキー(注⁵)っていう有名な映画監督が映画化してるんですけど、原作を読んだ時には、タルコフスキーのは見たくないな、と思いました。詩でも何でもそうですけど、いい文章っていうのは、字間とか字の配置とか、文章そのものから、気体が吹き付けてくる。どう考えてもいいっていう無定義のものじゃなくて、いいイメージをしやすいものとして立ち上げてくれたりもしますね。自分もそういう文章書けていたらいいな、と思いました。こう考えてくれ、こう考えたら気持ちがいいから、というのを、規定しない状態で、読み手の頭の中にあるイメージを使って、最大限に自由な、いいイメージを創れていたらいいな、と思います。

でも、自分の小説を映像化するのは、もちろんされてほしいと思います。読まれるきっかけになるし、本が売れて欲しいので。(笑)

◆津村さんは作品を執筆する中で、読者との＜対話＞は気にする余裕が無い、とおっしゃっていました

従軍・イギリスへの亡命を経て、急性肺結核・拒食により死去。享年34歳。

(4) ストルガツキー兄弟(Братья Стругацкие) …ソビエト時代のロシアのSF作家兄弟。兄アルカジイは1925年8月28日生、1991年10月12日没。弟ボリスは1933年4月14日生、2012年11月19日没。兄弟で共作し、その作品は多くがマルチメディア化されている。1972年に発表された『ストーカー(路傍のピクニック)』もその一つだが、映画は原作からだいぶかけ離れていると言われる。

(5) アンドレイ・タルコフスキー(Андрей Арсеньевич Тарковский) …1932年4月4日生、1986年12月29日没。ソ連の映画監督。叙情的とも言える自然描写、とりわけ「水」の象徴性を巧みに利用した独特の映像美で知られる。監督作品に『惑星ソラリス』『ストーカー』『サクリファイス』等がある。

が、津村さんにとって、書くという行為は、どのような作用があるのでしょうか。自己との＜対話＞ということでしょうか。しかし、小説として発表するということは誰かに読んで欲しい、響いて欲しいという＜対話＞が、想定されているのではないのでしょうか。何故津村さんは小説を書くのでしょうか。

津村：一番には、「仕事」です。約束をしたから。締め切りを破ったり、もう書けません、と言ったら、編集者さんとか上の人に怒られるから書いています。（笑）

二番目に、世の中にはいろんな小説があるので、書かれるべきことは書きつくされていると私は思います。私の小説が読まれる必然性はどこにもないのですけれど、その中でも書かれたことの無い、自分が読んだことのないものを書いている、というふうには考えています。こういう小説が読みたいんやけどなー、というものを書いている感じです。

◆読者がどう感じるか考えてる余裕が無い、自分が書きたいものを書いている、というお話が印象的でした。大衆受けする、多くの人に支持される小説は、読者を意識する必要があると思いますが、津村さんが作品を作る上では、最もふさわしい方法じゃないかと思いました。ただ、読者がどう感じるかを聞くというのも、作品づくりの参考になるのではないかと思います。私は、林出先生のまとめた教材で津村さんの作品を読んだだけですが、灰色の景色の中に、緑のポトスだけがいきいきとしているというイメージが残りました。

津村：ありがたいですね。イメージが残るってすごく大事。さっきストルガツキー兄弟の小説の話をしたんですけども、私は、そういうふうにイメージとして残るとするのはすごく嬉しいです。

◆①学校で教材として読まれることをどう思いますか。②高校生にはどんな本を読んで欲しいですか。

津村：①教材として読まれるのは不思議な感じです。私も高校の授業で『小さき者へ』という有島武郎の文章を読んでいて、有島武郎が不倫とかしてたのを知っていたので、不真面目な態度で読んでいたら、当時の国語の先生にすごく怒られたことがあって（笑）。そういう（教材という）コンテンツのなかに自分の作品も入ったということ、そんな不真面目な態度で国語の教科書を読んでいた人間である自分の作品が教材になったというのは、すごく不思議だなと思います。

②基本は何を読んでもいいと思います。読みたいものを読んでください。ただ、気持ちのいいものばかりを読もうとしないほうがいいと思います。受験とかしんどいと思うんですけど、大人になったらさらにしんどくなるし、さらに楽をしたくなってくるので、ちょっと手強いかなというぐらいのものを読んでいたほうがいいと思います。その時わからなくても、三十ぐらいになっていきなりはっと気づくこともあるし、十六の時に何となく受け取っていたものが、三十ぐらいになって雷に打たれたように「あれはああいうことやったんや！」とわかったりすることがあるので。

◆作家という職業について、将来目指している高校生に、どう話してあげればよいでしょうか。作家一本を目指している生徒に、別の仕事を薦めておくことが必要なのでしょうか。ご経験からお話いただければと思います。

津村：作家になるにはだいたい別の職業を経験しておけ、と言いますがけれども、それもあまり当たっていない気がします。自分自身の経験で言うと、基本、作家にならずにすむならならぬほうがいいとは思いますが（笑）。転職したいくらいなんで。本当にいやなこといっぱいあるし、割に合わないです。それでもなりたければ、どうかな…。小説だけ読んで（作家を志望する）、という人もいます。

思うんですけど、やっぱり、いろんなことに興味を持って、いろんなことを考えておいたりとか、一つの得意分野を持ってものすごく深めるか。小説そのもののオタクにならないほうがいいと思います。純文学だったら純文学のオタクになったりとかすると、結局そこに規定されちゃうんで。自分の小説を書きたいと思ったら、純文学だけ読むとか、エンターテインメント小説だけ読むとかいうんじゃないくて、テーマを見つけるために、もっと別の所に出て行って、いろんな本を読んだりいろんな映画を見たりしたら…。あと友達と話をしたりすることが、しょうもない会話からでもそこから一本短編を書けたりすることはあるので。親としゃべってても、親が時々すごいらくでもないことを言うとか——私、冷蔵庫の使い方について怒られたことで小説書いたことがあるんですけど（笑）、本当にそんなことでも、書いたら、「あー、わかるわー」と言われたりしたこともあるので。とにかくちっちゃいことでも、自分に価値のなさそうなことでも、いろんなものを観察してみたら、何かおもしろさが分かるかもしれない、テーマが見つかるかもしれないので、そういうアンテナを張り巡らしておいたほうがいいと思います。

◆いつも生徒に、自由に解釈させるのと、模範解答を与えることとの匙加減で悩んでいます。実際授業をなさっていて、どんなふうに生徒と意見共有するのか、あまりにも違うな、という解釈に対して、どういうお声かけをされるのか、教えていただくと幸いです。

林出：何でもいいから感想を書きなさいというのは、授業の場では、ふさわしくないのではないかとと思っています。それならどこかで、おしゃべりをすればよいわけです。例えばこのような『ポトスライムの舟』の教材を作りますね、そしたら、これはティーチャーズ・マニュアルがないわけです。そうすると、私が、私の存在というか、私が今まで勉強させてもらったこと、勉強してきたこと、人生で学んできたことも含めて、全てを賭けて読むわけです。その中で、問いを立てるわけです。問いというのは、生徒に「ここを考えてもらいたい」という所。「考えてもらいたい」と思った瞬間には、そこに既に線を入れているわけですね。線を入れるというのは、教師として、責任を持って入れています。模範解答は作ります、作らないなんていうのは、無責任だと思っています。この、自分が立てた問いについて、生徒にここまでは考えてもらいたい、ここを読んで、こう読めば、こうであろう、というところまでは要求したいと思っています。でも、授業はそれで終わりません。授業はそこから進むもの。私は授業で、できるだけ生徒の意見は否定しないようにしています。生徒がとんちんかんなことを言えば、「ここをこう読んで、こう答えたんだろうけども…」という言い方はしますが、四十人なら四十人いる中で、お互いに考えていることが深まっていくような、作品を読んで一人ずつが考えていたことについて、授業の中で違う意見の生徒を戦わせるか、それを何人かで黒板に書くことによって、あるいはフィードバックすることによって、答えが、考えが深まっていくことを目指しています。

津田：私は二十年前までは教室で教えていましたけど、それ以降は教えていないので、その時に凍結されている、凍り付いている疑問があるということで、この会の打ち合わせの時にメンバーに投げかけた質問が、これと同じなんですね。国語の正解って何か、ということですね。同じ教材を教えていても、重ねていくことで、教授者自身の中で深まりができて、ひょっとして以前は正解にしたものも、今は正解じゃないということになったりして、「あれ？」って思ったりしますね。解釈というものが、そこから変わっていくことを前提とすると、その時点その時点の定説というのが「到達点」と言える。ディスカッションをしたり、議論をしたりする中で考えが固まってくると、それが「到達点」、正解といえなくても、納得解だと、少なくとも二十年前までにはそういう形で生徒に説明していました。その「到達点」をテストに出すわけです。私は、そういうことで理解しています。

湯峯：教師として、自分の想定外の答えが出てきた時、戸惑いますよね。建前として、自分の好きなように読みましょう、いろいろ考えを出して、意見を出しましょうと言うのに、実際変わった意見が出る戸惑う。だいたい優等生は、先生がこういう答え期待しているだろうと思って、自分の考えを横に置いて、先生の期待に合わせて答えてくれるんで、スツといくんですけどね。そうじゃない時、そこにまさに＜対話＞があるんじゃないかな、と思うんですが、おそらく津村さんは、とんでもない解答をする生徒だったんじゃないかなと思うんですけどね？

◆何十年前、俵万智さんは、短歌のテスト問題について、疑問に感じるときがあるとおっしゃっていた。津村さんは、自分の小説が授業やテストに使われて、模範解答が作られるということ、どう思われるか。

津村：どう読んでくださってもいいんで、それは。自分は小説を書いたので、読んだらその読者のものになるんで、どういう解釈でもいいっていうふうには思います。それぞれが自分の立場からしか物を言わないから、嫌われることもあるし、それこそ、「なんで男が出てけえへんねん」って、男性に怒られる、みたい。それは男の人の立場から言っているんですね。でもまだ十八歳、高校生ぐらいまでだったら、立場っていうものがそんなにないから、読んでもらって好き勝手に言ってもらえる価値が、大人に読んでもらう以上にあるんじゃないかなというふうに思います。だから、とんでもない解答とかでも、どんどん収集したら、おもしろいと思います。

湯峯：津村さんの高校時代はどうでしたか？ とんでもない解答とかしましたか？

津村：私ですか？ いや、別に、国語の成績は結構良かったんで、学年で三番とか。数学が学年で下から三番とか、そんな。ものすごく極端な成績やったので。現国の先生には、いい点つけてくださってありがとうございます、って思っているんですけど。とんでもない解答、したかなあ？ あまり覚えてないです。とにかく嫌いな作品で寝て怒られたりはしました。「感動的な文章なのに！」とか、先生が言うてくるんですけど、「でも、この人不倫してたじゃないですか！」とか、思ったりするんです。便覧を読み込む子供やったから、知ってたんです、作家がどういう人間か。教科書に載っている作家をいちいち便覧で調べて、「へえ、この人こういう小説書くんや〜」とか、いやらしい読み方してました。

■国語教育の目指す先——＜対話＞が育てる力

津田：この小説を通じて、“出会わない系”に出会えた、というのが嬉しかったですね。もう一つは、こう考えてくれ、という規定はしない、開かれた＜対話＞、ということなんですけども、今、国語教育に対して外から聞くことが多くて、グローバル化の時代で、多様な価値観を認めざるを得ない、いろんな人が存在するという時代の中で、国語教育がどういうふうにユニバーサルデザイン化されていくのか、ということを考えていて。例えば、英語・フランス語と言語は違っても、言葉に内在する論理が、いろんな人からアクセス可能であるとか、そういうふうな方向を目指して、国語の力を鍛えていくにはどうしたらいいのかな、と考えているのですが。そういう意味で今日、津村さんがおっしゃった、ものの見方・考え方、作品としての伝え方というのが、腑に落ちるお話で。私としてはありがたかったです。

林出：この教材を作るとき、今宮高校の小山先生とか、守本先生の「土曜塾」のお話にとっても助けられました。教師は一人ひとりなんですけども、教材を通じて、こういう形で、教師同士、あるいは、その教材に直接は関係ないと思っても、講習会や研究会、今日のようなお話で、例えば津村先生のような作家の方からお話をうかがうことが、めぐりめぐって、自分の教材・授業なんかに助けになる、ということが、私の経験に数多くありました。私にこれだけ数多くあるということは、誰にでもあることだと思

うので、この会に来られている先生方は、他の先生方と、教材を通して、＜対話＞をしていくのがよいのではないかと考えています。

津村：私は国語教育に関しては、受けた立場からしか話せないですが、さっき「とんでもない解答」という話がありましたけど、他教科とは違って国語だけは、正しい答えじゃなくてもよい、っていうのがあるんですよね？先生の立場から、ああ、こんな見方もあったんや、と思える教科が唯一国語だと思うので、生徒さんの考えているとんでもない解答というのを、的外れやな、と思っても、そこから何か生まれるかもしれないので、そういうものも大事にさせていただけたらな、と思いました。でもそこで、こう考えたほうがあんた得やで、みたいなことは、絶対に言わないでほしいです。あくまで受験向けのものとして言うのはいいですけど、それはあくまで受験向けで、別に必ずしもそういうふうを考えんでもいいで、ということは、生徒さんに伝えてあげていただければな、と思いました。

湯峯：津村さんが小説の舞台設定のことで、特別な出会いじゃなくて、“出会わない”人の中で耐えるんだ、とおっしゃいましたけども、実際我々、ほとんどの人間がそうですね。特別な出会いに期待はしますけれどね。まずは裏切られる。でもその中で、津田先生がおっしゃった、オープンなく対話＞、オープンな考えがどんどん噛み合って広がっていく、そこに人生のおもしろさがあるんじゃないかな、と。我々国語の教師はどこまで、そこでオープンなく対話＞ができるのかな、と。本当にやるとなったらしんどいな、という思いがあるんですけど、そこが他の教科とは違う国語のしんどさやし、国語のおもしろさじゃないかな、と思いながら、私は聞かせていただいていたいました。

去年は、「国語って一体何を教えるねん、何を勉強するねん」というお話がありましたが、そこでもやはり＜対話＞ということが一つ取り上げられていて、今年のテーマにつながってきました。また、今日の話が何かの形で来年につながっていけば、と思いますので、また、お集まりいただければ、と思います。ありがとうございました。

（記録：大阪教育大学附属高校天王寺校舎教諭 能登 敦子）